

都市インフォーマル・セクターの現代的意味 ーバンコク首都圏における露天商を事例としてー

平成 21 年度入学

参加したフィールドスクール：インドネシアフィールドスクール

調査地（調査国）：タイ王国

竹口 美久

キーワード：都市，インフォーマル・セクター，経済発展，労働市場，露天商

1. 自分の研究テーマについて

本研究の目的は、都市インフォーマル・セクター（以下 IS）の位置付けがいかに変化したかを明らかにすることにある。具体的には、IS の典型例の 1 つである露天商に着目し、その現代的意味を考察する。

「インフォーマル・セクター」という語が指し示すのは、露天商や自転車タクシー運転手、廃品回収業等で、一般に都市貧困層が就業する職種であるとイメージされるが、その定義に関しては未だ統一の見解がない。

当初、余剰労働力を吸収する労働調整機能を果たすものと捉えられた IS は、産業の発展とともに縮小或いは消滅する筈であった。しかし現実には、経済発展を遂げた多くの地域においてそれは縮小せず、むしろフォーマル・セクター従事者のインフォーマル化というかたちで拡大している。ILO はこの状況を「インフォーマル経済の進行」とすると指摘し、世界的問題と考えている。

タイでは、労働人口の 51% が IS に分類される職種に就いており (National Statistics Office, Labour Force Survey 2005)、昨今の経済不振によりその数は増加傾向にあるが、その一方で、現在では都市貧困層と露天商の直接的な結びつきを疑問視する研究もみられる。本研究は、バンコクの露天商という特定業種を通して、中進国タイの現在において都市 IS が果たす役割を考え、「インフォーマル経済の進行」を問題視することへの疑問を呈するものである。



写真 1：軒先に並ぶ露店（Bangkok, Khet Din Daeng にて）

2. フィールドスクールで得られた知見について

6 日間滞在したタマンジャヤ村は国立公園と境界を接している村であり、住民と国立公園職員との関係性について考える機会が多かった。当初は、実務家である国立公園職員の感覚と住民のその違いから学ぶものがあるのではないかと考えていたが、実際には、各職員の感覚や意識の違いが、職員－住民間に以上に大きいことを知った。

現場で働くある森林監視官は、地元民であり行政官であることの苦悩を語った。この地域では、過去に住民と国立公園職員の間で衝突が起こっており、その際に公園の入口にある監視所が焼き払われたということであった。現在でも住民との関係は完全に回復したとは言えず、監視官は食品や日用品を、事務所からの支給に頼っている。

事務所働く職員達は、国立公園と地元住民との共存に関心を寄せ、住民を組織して養蜂やローカルガイドの知識向上等の住民エンパワーメントプログラムを稼働させているが、村での評価は決して高くなく、個人が設立したグループの活動に参加する人も多い。このように、各主体の考えが相互に結び付

かず、結果としてどの活動も十分な成果が上がっていないようだ。

今回のフィールドスクールは、講義等の多くが事前に日本で済んでおり、現地では専らフィールド調査や観察に専念できた。又、頻繁に持たれた意見交換の場には、学生のみならず先生方やインドネシア人スタッフも参加して下さったので、大いに議論が盛り上がり、学ぶところが多かった。



写真2（上）：タマンジャヤ村の地図化を試みる



写真3（上）：国立公園と村の境界付近。国立公園の敷地内にも畑が広がる

3. フィールドスクールで学んだことをどのように研究テーマにいかせるか？

筆者は研究対象地域に大都市バンコクを想定しているが、露天商の多くは農村出身者であるため、本格的な調査を前に農村の暮らしを学ぶ機会を得られたことは、今後の研究の礎となるものである。

又、露天商、彼らを取り巻く政策や政策立案者、NGO等、多くの主体や要素が複雑に関係しているということを再認識する、大きな示唆を得た。さらに、これまで全く異なるものとして認識していた研究者と実務家について、現地との係り方という点で、さほど大きな違いはないのではないか、と考えるに至った。フィールドでは、研究者も実務家も、互いの役割を相互補完的に遂行していく必要があるし、実際にそうしているのを目にしてきた。研究者という自分の立場や研究テーマに固執することなく、フィールド調査を進めていくことが大切であろう。

対象国の枠組みを超えた視点での研究を目標に据えているため、このような機会に再び恵まれることがあれば、是非参加したい。